

「阪谷の今を考える座談会」第2回 ご報告

開催日：令和4年3月11日（金） 午後7時～

場 所：阪谷公民館 2階 大広間

参加者：21名

テーマ：「さかだに瓦版 第2号」の内容から など



- 率直な感想や日頃思っていることを自由に言い合おう!!



【座談会の目的やルール】

[目的]

- 阪谷地区の今について、みんなで思っていることや考えていることを自由に話し合っ、そこから地域の問題解決のヒントになるようなことがないか、阪谷の望ましい将来像とはなどについて考えましょう。

(※みなさん、地域のいろいろな団体や会で役などをされているとは思いますが、ここでは、一個人として思いや考えを言っていただければと思います。)

[ルール]

- この会で結論をとることはしません。みなさんの意見は貴重なご意見として主催側で参考にさせていただきます。ですので、他者の意見に同調するのは大いにOKですが、否定することはやめましょう。

[その他]

- この会で出た意見は、貴重な意見として公開（氏名等は公開しません）することにご了承ください。

【座談会（第2回）で出た感想、意見等】

[4テーブルに分かれて、テーブルごとで下記テーマ等について意見交換]

- 主なテーマ： ◆「さかだに瓦版 第2号」の取り上げた内容から
- ・ 阪谷地区の働く場の実情
 - ・ 阪谷地区の農業の実情
 - ・ 阪谷地区の観光業の実情
- ◆今後踏み込んで話し合いたいテーマ（今一番の課題）は？

第1テーブル

- ◆ 奥越地域の有効求人倍率はある程度あるが、給料（賃金）が低く、将来年金に関わってくるので、満足できるものではない。そのため、どうしても市外、あるいは県外に職を求めようになってしまう。今後、賃金面の充実が求められる。
- ◆ 阪谷地区の豊かな自然環境を活かして、今後増えてくると予想される空き地や空き家（古民家）を再生し、都会から家族そろって引っ越してこられるような環境を整えていったらどうだろうか。
- ◆ 離農者の増加化とともに耕作放棄地が増えてくると思われるが、チャレンジ農場経営や体験農場を企画し運営するのも一案である。農業の再生を図り、食料自給率を高めるため、市等の補助（助成）金の予算化、増額をお願いしたい。
- ◆ 「阪谷地区の米は美味しい」との声をよく聞き、高評価なので「阪谷米」のブランディングを進め、その魅力を強く継続的に発信していく必要がある。また、農業の後継者不足を補うため、田圃を区割りし農業に興味関心ある人々に貸し出し、耕作してもらったらどうだろうか。
- ◆ 当地では大麦を作っているが、パンや中華麺などの食材としての「小麦」作りにも着目し、その品種改良により将来的に「小麦栽培」も行ったらどうだろうか。
- ◆ 六呂師高原など阪谷地区を訪れる観光客が減少傾向にあるが、今後県及び市が計画している六呂師高原再開発に向けて、「六呂師高原及び奥越エリアのアウトドア観光推進構想」とともに当地区の観光資源（素材）を精査し、魅力満載の情報発信を専門家（その道のプロ）に依頼したり、観光大使を委嘱するなどしたりして、情報発信方法を工夫していくと良い。この点において、現在進行中の県・市の六呂師高原活性化構想に期待するところは大きい。
- ◆ 六呂師高原の再生構想に合わせ、当地区に散在する将来空き家になると思われる貴重な

古民家を再生利活用すべく、古民家群を六呂師区等に創出し、貸別荘として管理運営していったらどうだろうか。

第2テーブル

- ◆ 若者の価値観は変わってきており、まずは「利便性」を求め、子どもの日常を優先し、後継者という意識は薄れている。また、阪谷地区には生業（なりわい）となる職場はなく、阪谷地区に住んでいても、福井まで通勤し、地区の行事に参加しようという気持ちは乏しい。現状は、若いうちは都会で過ごしても、定年後は故郷に戻ってきてほしいとしか言えない。
- ◆ 阪谷の米をはじめとする農作物は美味しい。これは土壌や気候、地形などが作用している。この「食の美味しさ」を売りにすべきだと思う。地元で販路を構築するぐらいの組織力を作れないだろうか。美味しいものを食べてもらいたいという生産者の思いやりを形にしたい。
- ◆ いい産物を常に提供していくことで消費者との信頼関係は築かれていく。道の駅や地区の施設での販売体制を整え、リピーターを生み出していくことが重要である。
- ◆ 適地適作を主張すべきである。米は阪谷産がベストというイメージ作りをし、阪谷の地域性にこだわった販売体制を作るべきだと思う。
- ◆ 初めから成功を求めるのではなく、2～3年の助走期間を持つぐらいのゆとりをもって特産物づくりに励むことも大切である。失敗を重ねながら、本物を作り出していく必要がある。

第3テーブル

- ◆ 子育て最中の年代の主婦メンバーは、一日中働き、夕方はお迎えや家事をして、土日は家の行事や買い物で終わり、くたくたである。今はまだ、祖父母がいて、頼りっぱなしでやっていけているが、このまま10年ぐらい先のことを考えると不安である。また阪谷保育園や阪谷小学校がなくなると、自分の仕事にも影響があり、迎えが遠くなったり、休暇を取ってでも子どもをみたり行事にでたりしないといけなくなる。
- ◆ 道の駅ができてから、その流れで自然を求めて阪谷方面に来られる方もいるが、スターランドも休館しており、自然な野菜を売っているところもなく、橋爪の工房や六呂師の特産物会など知っていても紹介できない状況がある。

- ◆ 阪谷でしか買えない限定の野菜や加工品、また、星空なども地元で古民家を改装して星をみたり宿泊できたりするところを作るなどして、他と違うことを生み出すことを考えないといけない時期に来ていると思う。そうなったら阪谷に住んでいる私たちにも働く場所が作れるのではないかと思う。
- ◆ なんといっても阪谷は食の故郷である。スターランドが盛んな頃は、食するつどいのメンバーで地元の新鮮な野菜を調理してふるまってきたが、当時の方々も高齢になり継続が難しくなっていた。やはり、人を呼ぶには、美味しいものが阪谷にあることをアピールし、食してもらうことである。匂いに引き付けられて人は来る。そうやって食の活性化につなげていかななくてはいけない。
- ◆ 阪谷に住んでいても隣の家庭環境や子ども同士も知らなかったりするため、災害時や雪下ろし時に助けを求めることもできない気がする。嫁いできた当時は、地区で行われる冠婚葬祭の場が、地区の方との交流や今でいう伝承料理を自然に覚えていける場であったが、今ではそれもない。
- ◆ 以前は、スターランドを経由して伏石の天狗岩や落合のびんつけ岩などといった岩巡りのルートが作られていた時もあった。道の駅ができ、阪谷に人を呼ぶためには、そういったルートを改めて復活できないかと思う。また、それには私たちももっと地域のことを勉強しなければならない。
- ◆ こういった地域の方々との座談会が必要である。地域の実情を知りたい。(嫁いできて、日中は仕事に出ているし、地域の行事は祖父母などが出るためよくわからない。人との付き合いがあるから今があると思う。この座談会に出て地域以外の方と仲良くなり、話が聞けたので参加してよかった。)

第4テーブル

- ◆ 阪谷地区は地形的に中山間事業の対象となる農場が多いので、その補助を受けて、うまくやればやっていくことはできると思うが、昔と違い農業も自由主義化（米の価格など）が進んでおり、農業で儲ける（商売する）というのは大規模農家による経営でないと無理であろう。
- ◆ 福井新聞の記事にも載っていたが、自分達で食べていく分を自分達で作っていくことを基本に考えた「自給的農業」でやっていくべきである。ただ、本当に個人だけでやっていくのは厳しい部分も多いので、地域でのつながりを持ち、各集落などグループでまとまって相互で助け合いながらやっていくのがいいのではないかと思う。
- ◆ ある程度自由な時間が増える年配の者が主として自給的農業を続けていき、同世帯の若

者は農家に生まれた者として、他の仕事をしながら、その手伝いとして関わる形でいいのではないか。そうやって農業でのつながりをもって、若者がある程度年配者になって時間ができてきた時に、今までそばで見てきたその農業を継いでいければと思う。大規模農家だけになって農家数自体が減り、そういった農業でのつながりがなくなったら、若者はさらに利便性だけを求めて阪谷から離れていくと思う。

- ◆ 観光では、今、六呂師高原の活性化構想の話があるが、どこにでもあるような二番煎じの内容は今後厳しいと思う。観光は流行り廃りの激しい分野（コロナなどの社会的情勢にも影響されやすい分野）であり、本当にそれで勝負しようとする者は、経験を持ったプロが世の中の動向を常に調査しながら手を打っている。そういった中で人に来てもらうよう勝負するには、阪谷のそこにしか来ないとないといった「阪谷独特のもの」をつくり地道にアピールしていかなくてはならない。そういうものであれば、例え価格が高くても、それを求めてくる人にはあまり大きな問題でないように思う。
- ◆ 多くの課題の中で一番の問題は過疎化（人口減少、高齢化）であろう。これが、空き家の問題や高齢者の雪下ろしの問題などの原因になっており、区の運営などを困難にしていく原因でもある。
- ◆ 区の運営を継続していくため、区費の設定や区役員の構成（みんなが何かの役を担うよう区の役員を増やして分担して担う）、区行事の統合（同じような行事は統合して行事数を減らす）や外部発注の検討（自前でやっていた草刈りなど外部の業者に発注できるものは発注する）などの工夫をしている。